

8. 縄文土器について

第1群土器 早期中葉に編年される土器群である。(第32図1~18)

1は口縁部片で、横位の沈線文に縦位の沈線文が施され、胎土に小石を含み、色調は褐色を呈している。2・3は平行沈線文が施され、色調は褐色を呈している。4は不連続沈線文が施され、胎土に小石を含み、色調は茶褐色を呈している。5は棒状工具による不連続沈線文の間に竹管による連続刺突文が施され、色調は茶褐色を呈している。6は斜行沈線文の上に横位沈線文が施され、色調は茶褐色を呈し、裏面が荒い。7は横位沈線文に縦位沈線文が直交するように施され、色調は褐色を呈し、裏面の器面は荒い。8は横位沈線文が施され、色調は茶褐色を呈している。9・10は棒状工具によるもので、9はための棒状工具で平行沈線文が、10は平行沈線文と斜行沈線文が施されている。11は不連続斜行文が施され、胎土にやや大きめの小石を含み、色調は明褐色を呈している。12は平行沈線文の間に刺突文が施され、色調は褐色を呈している。13・14・15は平行沈線文が施され、色調は褐色を呈している。16は不連続沈線文が施され、色調は赤褐色を呈している。17は平行沈線文が施され、胎土は小石や砂粒を含み、色調は褐色を呈している。18は丸底に近い尖底で、胎土に石英を多量に含み、器面は荒く、色調は褐色を呈し、焼成は良である。(1~16堀西原 17・18渡里)

第2群土器 早期後葉に編年される土器群である。(第32図19~24) いずれも、条痕文系土器で、胎土に繊維が含まれ、内外面に文様が施されている。

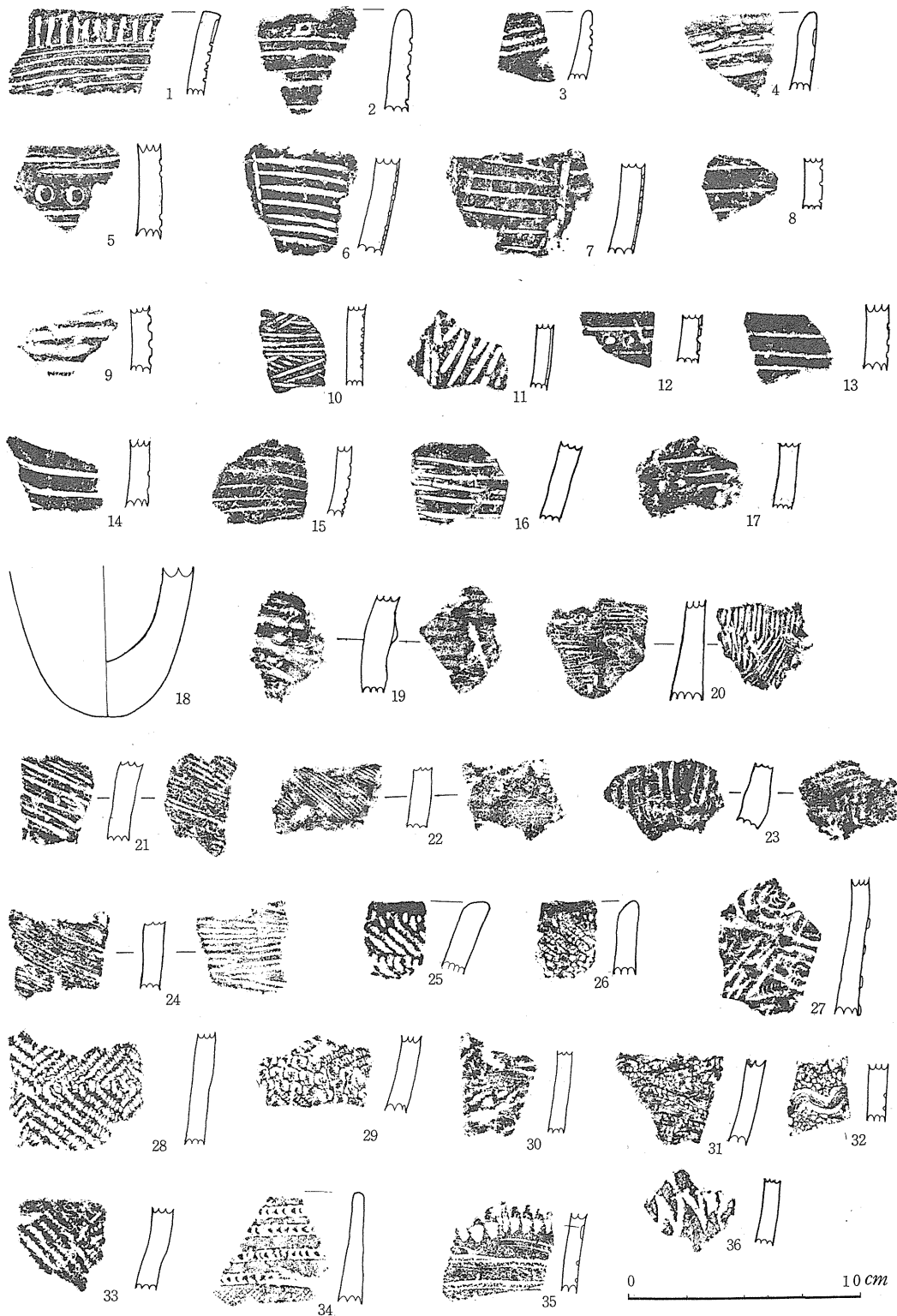
19は表に1条の隆帯が施され、色調は暗褐色を呈し、裏は貝殻条痕文が施され、色調は褐色を呈している。20は貝殻条痕文が内外面とも施され、色調は表は褐色、裏は黒色を呈している。21・22・23・24は貝殻条痕文が内外面ともに施され、色調は21は褐色、22・23は赤褐色、24は暗褐色を呈し、胎土に雲母を含む。(19堀西原 20渡里 21~24袴塚)

第3群土器 前期前半に編年される土器群である。(第32図25~33) 胎土にすべて繊維が含まれる。

25・26はともに斜縄文が施されており、色調は褐色を呈している。27は半截竹管による斜行文とその上に瘤状の小突起が貼りつけられ、さらに爪形文が施されている。色調は茶褐色を呈している。28は羽状縄文、29はループ文が三段に施され色調は褐色を呈している。30は器面が磨耗しているが斜縄文が施され、色調は褐色を呈している。31は縄文原体の圧痕文が施され、色調は茶褐色を呈している。32は縄文を地文とし、そこに半截竹管によるコンパス文が施され、色調は茶褐色を呈している。33は縄文が施されている。(堀西原)

第4群土器 前期後半に編年される土器群である。(第32図34~36)

34は半截竹管による横位の連続刺突文が施され、その下に縄文が見られる口縁部片であり、



第 3 2 图 绳文土器拓影图 (1)

色調は茶褐色を呈している。35は三角形を呈する連続刺突文が2段横位にみられ、その下にはかなり自由に沈線が施されている。36は貝殻の口唇部で文様が相互に交差するように施されている。
(34・36堀西原 35文京)

第5群土器 中期中葉に編年される土器群である。(第33図1～3) いずれも胎土中に雲母を含む。

1は口縁部片で角押文がアーチ形に連続的に施されている。色調は赤褐色を呈している。2は口縁部に爪形文が施され、隆帯のはりつけ部には角押文が二重にまわっている。色調は暗褐色を呈している。3は篋によるきざみが一部に施され、色調は外面が黒褐色、内面が褐色を呈している。
(1～3渡里)

第6群土器 中期後葉に編年される土器群である。(第33図4～7)

4は口縁部片で波状の隆帯が2段に施されている。胎土は小石と砂粒を含み、色調は暗褐色を呈している。5は複節の縄文を地文とし、それを磨り消し文で区画している。色調は暗褐色を呈している。6は縄文が施されており、色調は褐色を呈している。7は縄文が施され、沈線で文様を区画し、沈線の間は磨り消してある。色調は褐色を呈している。(4文京 5～7渡里)

第7群土器 後期に編年される土器群である。(第33図8～10)

8は口縁部に縄文を施し、後に磨り消している。色調は赤褐色を呈している。9は縄文が施されている。色調は赤褐色を呈している。10は篋状工具による沈線文が、斜めにつけられ、胎土に雲母と砂粒を含み、色調は褐色を呈している。
(堀西原)
(石川文男, 郡司薫, 沼田寛, 根本一成)

9. 弥生土器について (第33図11～17)

11は、口縁部近くの破片であり、貼り付け部に竹管工具による押圧文がみられ、その下に単節縄文が施されている。12は、口縁部片で、16cmほどの口径を有す。文様構成は11と同じである。13は頸部片であり、付加縄文をもち、14は、撚糸文が施されている胴部片である。15・16は底部片である。15には撚糸文が施され、底面には、布目圧痕文がみられる。16には、付加縄文が方向をたがえて整然と施され、底面には、木葉圧痕文がみられる。13・14は黒褐色、11・12・15・16は褐色を呈し、焼成はすべて良好である。17は、残高17cmの底部から胴部にかけての土器片であり、底部付近は完形である。底部近くは無文帯であり、その上に単節縄文が施されている。